分科会研究発表・研究協議等記録

小 学 校

第２分科会
札幌市立白楊小学校

第３分科会
札幌市立宮の森小学校

第４分科会
札幌市立福住小学校

第５分科会
札幌市立資生館小学校

野幌森林公園 北海道百年記念塔
（札幌市厚別区 江別市 北広島市）

研究主題

楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習

～今こそ確かな体育の力を！～

札幌市立白楊小学校

１　研究発表の概要

発表者：札幌市立白楊小学校　教諭　岩田　　悟

(1)　研究主題

「楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習」

(2)　研究の仮説

「運動することそのものに楽しさを味わうことができ，友達と共に追求しながら，伸びを実感できる体育学習を展開することで，確かな体育の力をバランスよく育むことができる。」

実態から児童像を設定し，児童像に迫るため研究仮説を立てている。また，幼小連携にも意識して取り組んでいる。

(3)　研究の視点

〈視点１〉

「楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！教材の開発・工夫と学習展開」

〈視点２〉

「確かな体育の力を保障する指導と評価の充実」

２　公開授業について

(1)　第１学年　ゲーム「宝取り鬼」　　授業者　千葉なつき

子どもの主な活動	教師のかかわり
○準備活動 ・準備運動をする。(ミッキーマウスマーチ) ・スキルアップゲームをする。 ・チームでしっぽ取り鬼、通り抜け鬼を行う。	 ・子どもと一緒に行う。 ・子どもたちと一緒に動く。 ・積極的に声をかける。(チームや個へ)
○課題把握 ・「宝取り鬼で，しっぽを取られずに宝をたくさん取ろう」	 ・課題を提示し，確認させる。
○ゲーム①（宝取り鬼ごっこ） ・ゲーム前の挨拶をしてゲームを始める。 ・動きの工夫 （目の前にスペーができると，そこへ走りこむ。相手の直前で横へ走る。味方の後ろにかくれて抜け出す。）	 ・積極的に励ましの声をかけたり，動きのアドバイスをしたりする。

・ゲーム終了後，自分たちの得点を確認し，挨拶をする。 ○全体交流 ・自分が工夫したことを発表する。 （人のいないところに走る。速く走る。鬼が見ていない方へ走る。鬼と反対の方へ走る。行くふりをして，反対へ行く。）	・勝敗を明らかにし，挨拶をして終わらせる。 ・しっぽを取られずにたくさん宝を取るために，どのように動けばよいか交流させる。 ・板書で図示したり，子どもを使ったりして，動きを具体化する。
○追求活動　ゲーム②（宝取り鬼ごっこ） ・動きを工夫する。 ○課題解決 ・学習を振り返り，自分や友達の動きの変化について発表する。 ○整理運動 ・使った部位のストレッチをする。	・アドバイスしたり，よい動きを見付けたりする。 ・しっぽを取られないためには，どんな動きをしたのか確認させる。「今日のきらりはだれかな。」 ・次回の学習の見通しをもたせて，学習を終わる。

(2)　第４学年　体つくり運動　「白楊宅急便」　　授業者　岩田　　悟

子どもの主な活動	教師のかかわり
○準備活動 ・ストレッチングを念入りに行う。 ・体ほぐしの運動(マイプランランニング)を行う。	・子どもと一緒に行う。
○課題把握 ・「長なわキャッチボール」が，コースの中に追加されたことを知り，動きについての見通しや課題をもつ。	・新しい種目を図示しながら紹介する。 ・動きのモデルを出し，動きのポイントになりそうなところに気付かせる。
○試しの運動① ・「長なわキャッチボール」を行い，パスのタイミングを考える。（空中で，飛ぶ瞬間に，地面で，ふわっと等）	・グループごとに巡回し，動きのポイントをつかませるように，声かけをする。
○追求活動～「白楊宅配便」コース挑戦① ・ペアをつくり，互いに声をかけ合ったり，タイミングを計ったり，協力したりしながら運動をする。	・積極的に声かけをし，いい動きを発見したり，よりよい動きへのアドバイスをしたりする。

○全体交流 ・長なわとキャッチボールの両方を成功させるのには，どうすればよいのかを交流する。 ・うまくできるコツを発表する。 （音のリズム，胸にパス，地面についた時にパス，跳んでいる時にパス）	・うまくできたグループの動きを取り上げながら，動きのコツをつかませる。 ・動きのコツを板書し，整理する。
○試しの運動②	・積極的に，それぞれのグループにかかわり，動きのコツをつかませるようにはたらきかける。
・「長なわキャッチボール」を行う。 ・跳び手と回し手，それぞれ声をかけをしながら工夫して練習する。（ハイでキャッチ，縄だけで，縄なしで，膝でリズムをとって）	
○追求活動～「白楊宅配便」コース挑戦②	
・ペアをつくり，それぞれに動きを工夫しながら取り組む。	・「長なわキャッチボール」の運動を中心に，子どもたちの動きにアドバイスをする。
○課題解決	
・学習を振り返る。（声をかけ合った。コツを出し合ってうまくいった。）	・自分や友達の動きについて具体的に振り返らせる。
○整理運動	
・使った部位のストレッチをする。	・次回の学習の見通しをもたせて学習を終わる。

3　研究協議

(1)　第１学年　ゲーム「宝取り鬼」

質　問　・　意　見	見　解
・運動の特性をどのようにとらえているのか。 ・スピードの変化，フェイントの工夫など，あまり動きの変化が見られなかったのではないか。	・特性としては，高学年のボールを持たない動きとした。 ・成功体験をさせたいので，横スペースのあるコートや４対３の人数にした。
・４対３のアウトナンバーにする意図だが，動きの工夫ができていたのかという点を考えると，あまり見えてこなかった。ただ，まっすぐ走るという動きばかりが目立っていた。 ・課題解決的とは，どうおさえているのか。個の課題か集団の課題か。	・文科省の冊子を参考に，身に付けさせたい動きを考え，人数やコートを設定したが，全体交流を生かした動きには至らない面もあった。 ・動きを通して生まれる「しっぽをとられないで，宝をとろう」を動きを通して解決していくことが課題解決と押さえている。

・指導と評価の関係について，どうなっているのか。	・重点をもって指導していく。子どもが自己評価できるような教師のかかわりを意識している。
・得点が高すぎて子どもの実態とかけ離れていたために，子どもが自己評価しづらかったのではないか。 ・１回目のゲームでは，あまりしっぽは取られていなかった。立ち止まる部分を意図的につくってもよかったのではないか。 ・子どもはよく遊んでいた。守備側の動きが難しかったのではないか。 ・攻撃に，歩く・止まるの動きも見えてきていた。 ・鬼あそびは，追う・追われる関係が特性ではないだろうか。それが見えてくるようにする二人の関係が大事ではないか。	・授業作りの際に，楽しいからどんどんやるのか，つまづきを作り，考えさせていくのかを考えたが，今回は自分が乗り越えられない課題を設定するようにした。

(2) 第４学年　体つくり運動　「白楊宅急便」

質　問　・　意　見	見　解
・全体交流が良かった。二人のペアでの動きも良かった。 ・個々のめあては，どうだったのか。また，子どもの動きの幅をどう考えていたのか。 ・長なわとボールを与えていたが，動きを工夫させるならば，なわとびをやった後からボールを与えてもよかったのではないか。 ・動きを工夫させるために，どんなイメージをもっていたのか。 ・用具と用具を組み合わせるのは難しい。全員ができたグループはなかった。 ・ターザンロープをなぜ取り上げたのか。 ・体ほぐしの運動は，準備運動で終わっていいのか。 ・運動している子は楽しそうだった。思考判断の時間がほとんどなかったのではないか。作戦タイムなどがあってもよかったのではないか。	・意欲面を考えて，２人のペアとした。ペアは固定ではなく，グループの中で替えられるようにした。互いに認め合え，継続して伸びを見られるペアにしたいと考えた。 ・動きのコツをつかむことを大切にした。 ・カードは持たせなかったが，個の伸びは意識できるようにしている。どう変わったか，どうできるようになったかがわかるようにしたいと考えている。 ・工夫としては、バリエーションの工夫のほか，運動のコツをつかむのも工夫と考えている。これが，技能が伸びるための思考判断と考えている。 ・組み合わせの運動に難しさがあったかもしれない。ターザンロープでは，目的地でおりるということをねらいとした。 ・体ほぐしは，ねらいをもち，継続して行ってきている。その中で子ども同士のかかわりも見られる。

	・思考判断の時間は，特に設定はしていないが，運動しながら十分にそういう部分は確保できていると思う。
・条件を変えることを先に行ってからコツをつかませていくという流れも考えられるのではないか。	・経験していない運動を取り入れることで，カリキュラム上，難しい面があるが考えていきたい。

4　支部研究発表について

○発表の概要　　発表者：更別村立更別小学校　教諭　青木　真理

・第45回北海道研究大会の成果と課題について
「わかる」→「できる」過程を重視
・２つの視点を設定し，研究を進めてきた。
①「分かる」「できる」が実感できる教材化
②よりよい動きを追求し，学び合う授業づくり
・実践例の発表
「感覚づくり－動きづくり－実践」の流れを生かした単元計画
小学校３年「マット運動」・「フラッグフットボール」
小学校４年「スケート」

5　指導講評

(1)　研究について

・動きを考えるとき，他の動きとのつながり，関係を考えさせるといい。
・「わかる」から「できる」とは，なかなかうまくつながっていかない。知識と感覚では，その受け取りで大きく変わってくる。感覚から，できそう，やってみようという気持ちが生まれてくる。感覚づくりは，下位教材によって，こんな感じでやれれば次の動きにつながるものである。それが「わかった」になる。

(2)　第１学年　ゲーム「宝取り鬼」

・鬼あそびはボール運動につながるが，ボール操作をしない動きづくりである。走・跳の動き（まっすぐ）とは違う動きである。止まる，ジグザグ，かわすという動きがある。また，にげる動きもある。これは，後ろからくる人の気配を感じるのを育てる上では大切なものである。
・幼小の連携を考えると，少し工夫させると，今日のゲームは幼稚園でも可能である。人間は二歳で走り出し，三歳でまっすぐ，四歳で方向変換が可能である。五歳では，相手をかわす動きができるようになるものまである。
・実践例としては，宝物をとった後に，的当てをしたものもある。

(3)　第４学年　体つくり運動「白楊宅急便」

・動きの関係をおさえる。教えたい動きはどういう位置付けにあるのかを考えるといい。

・長なわはできるようになってきたが，ジャンプしながら投げるという動きについては，下位教材として何があるのかを考えなくてはならない。
・運動は，何をねらいにするかによって意図的な使い方が変わってくるし，これは評価にも反映してくる。

6　成果と課題

(1)　成果

・教材の工夫により，子どもたちが夢中になって運動に浸る姿が見られた。
・ペアやチームで声を掛け合い，動きを高めようとする姿が見られた。
・評価規準をもって授業に臨み，子どもたちへの効果的なかかわりをすることができた。
・全体交流において，板書や動きの具体を示すことで，次の運動につながるコツの追求ができた。
・学習カードを使うことで，個の課題追求や友達の動きへの気付きに生かすことができた。

(2)　課題

・１年生では，場の設定に工夫の必要があった。(コートの使い方や人数)
・４年生では，いろいろな運動を流れで行う中で，一つ一つの動きがやや雑になっている面が見られた。
・実態をふまえ，運動の特性を押さえ，ねらいを明確にした教材の吟味が必要である。

研究主題

何度も挑戦し，仲間と動きを高め合う体育学習

札幌市立宮の森小学校

1　研究発表の概要

(1)　研究主題

「何度も挑戦し，仲間と動きを高め合う体育学習」

(2)　研究の仮説

何度も挑戦したくなる教材と仲間と高め合う交流場面の設定が，動きの高まりにつながる。

(3)　研究の視点

〈視点１〉積み重ねが生きる教材化

〈視点２〉問題意識を共有できる学習展開

2　公開授業について

(1)　第３学年　走・跳の運動「幅跳び」　　授業者　石村　宣人

【準備活動】

・ストレッチ運動（上に伸びる，屈伸，跳躍，伸脚，アキレス腱，手首足首，首・肩回し）

【課題把握】

・「踏み切りをどのように工夫しよう？」

【いろいろな跳び方に挑戦】

・ビッグジャンプ

・スリージャンプ（重点的に指導）

→腕を振ってふわっと跳ぶようにするとよい。

・ダイナミックジャンプ

【ポイントゲットゲーム①】

・踏み切りの仕方に着目できるよう子どもたちに声をかける。

・どのように踏み切っていたのかを考えることができるようにかかわる。

・子どもたちの反応

→「はねている感じ」「跳んでいる感じ」「片足で押す感じ」「ドシってなっている」等

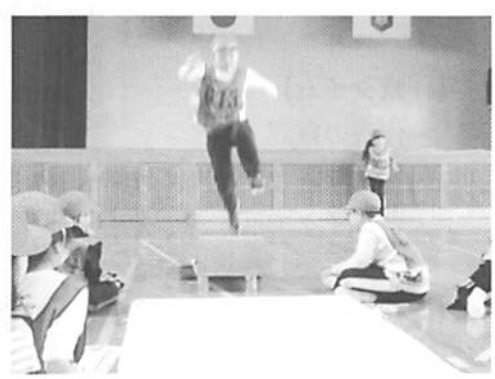
【交流（踏み切りのコツについて）】

・走って跳ぶときに強く踏む。

・上に跳んで下に着地するとよい。

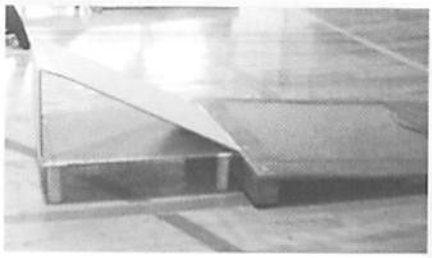
・踏み切り板をつま先でジャンプするとよい。

【スリージャンプ】



【踏み切りに着目】

・スリージャンプみたいにふわっとするとよい。
・腕を振る。
・秘密兵器（練習器具）の提示
・上の方向にしっかりと蹴ることを大切にする。


【秘密兵器（練習器具）】

【練習】
・練習器具を使って練習。
・置いている角度に沿って跳ぶとよい。

【ポイントゲットゲーム②】
・上の方向に跳ぼうとしている子どもたちの姿が見られた。
・練習器具を用いて，跳ぶ角度を上げる姿が見られた。

【上の方向に蹴る】

【まとめ】
・上の方向は大事であるということの確認。

【整理活動】
・ストレッチ運動（手首足首，肩回し，屈伸）

【後片付け】

(2) 第６学年　ボール運動「ゴール型」（フラッグフットボール）　授業者　山﨑　稔英

【始業前】
・グループごとの準備運動（ストレッチ）
　屈伸　アキレス腱　腕のストレッチ　手首足首　首

【学習カードによる前時の振り返り】

【準備活動】
・２対１のランゲーム
・ランキャッチゲーム
　ボールを持っている人に体を向けるよう声をかける。

【試合前に肩を組んで気合いを入れる姿】

【課題把握】
・「仲間の特徴を生かした作戦を成功させよう！」
・「この人がいるからこうしよう」という作戦を意識することを確認した。

【お試しゲーム（４回ダウン⇔パドルタイム）】
・ボール隠し作戦
・ロングパス作戦
・パス＆ラン作戦

パドルタイムでしっかりと作戦を確認し合いながら４回の攻撃を行う姿が見られた。

○青対黄（青の攻撃）
①ロングパス～△
（成功したが２回投げてしまい失敗）
②ランプレイ～×
③ランプレイ～○
④パスプレイ～×（キャッチ失敗）

○赤対青（赤の攻撃）
①隠し作戦　～×
②パス作戦　～×
③ロングパス～×
④ランプレイ～○

○赤対黄（黄の攻撃）
①ランプレイ～×
②ランプレイ～×
③ランプレイ～×
④ランプレイ～×

【作戦タイム】
・作戦の確認
・どんな練習をするのかの確認
・フェイクで回す練習，パス練習，ボール隠し作戦の練習

【４対３のメインゲーム①】
・各チームの作戦の様子

【交流（仲間のよさについて）】

・「フラッグをとられそうになったけどあきらめなかった。」
・「Ａくんは，はじめの頃は全然できなかったけど，前よりもうまくなっていて，今日の最後にはタッチダウンできてよかった。」
・「ジャマーの時にジャンプしてボールを取っていた。」
・「タッチダウン成功の陰にブロックの人たちの気合がすごかった。」

【作戦の確認】

【整理活動】

・ストレッチ運動（手首足首，屈伸，肩回し）

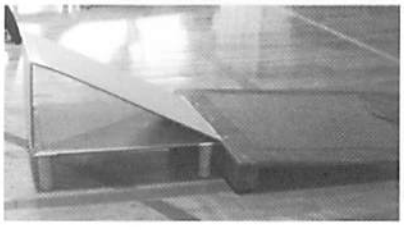
3　研究協議

(1)　研究について

・「もっとやりたい！」が生まれるために，安心して何度も試せる場や用具などの教材の開発を重視している。
・同時に即自的かつ具体的なかかわりをすることで，課題解決への手ごたえを感じ，「ここまでできるようになった。」と実感しながら日常化への意欲を高めていくのである。
・研究の視点
　〈視点１〉積み重ねが生きる教材化
　〈視点２〉問題意識を共有できる学習展開
・研究の具体
　２年　「鬼遊び」
　５年　「ゴール型ゲーム（バスケットボール）」

(2)　第３学年　走・跳の運動「幅跳び」

【練習器具（秘密兵器）について】



・秘密兵器を用いることで子どもの動きがダイナミックになった。
・秘密兵器が必要だという子どもは，自分たちで跳び方を工夫している。
・始めのゲームでは踏み切りの角度が低かったが，踏切角が変わることで目標とする場所にたどり着く意識が芽生えた。
・秘密兵器は，着地・踏切角には有効であった。
・秘密兵器を置くことで，子どもの目線で着地点の的が見えなくなった。
・着地点の的が見えにくくなったので，片足着地になってきた。
・秘密兵器の子どもへの提示の仕方がどうであったか。子どもにとっては唐突感があったかもしれない。
・技能にはプラス，思考にはマイナスという意見があった。
・秘密兵器を置いてみて有効に働いた子，妨げになった子がいた。
・秘密兵器を先に出して，「こんな風に跳んでほしいんだけど」とイメージ化すると目指す姿に近付くのではないか。

【ポイントアップゲームについて】
・ポイントアップゲームをすることで動きが高まっていくはずである。
・遠くに跳ぶことと，目標の的におさまるということに矛盾を感じる。
・子どもは思いきり遠くに跳びたいと思っている。ここが矛盾に感じる。
・一本のラインをひいてそれを目標にすることで，自分の伸びを実感できる。
【教材化について】
・中学年の幅跳びは距離を競い合う競争の仕方，工夫の仕方など，技能ポイントが盛りだくさんである。
・３年生には陸上選手のように跳ぶことは難しいのではないか。
・空中を舞う感覚を味わうなど，ほかにも楽しさがあるはずと考える。
【その他】
・一人一人が跳ぶことを考える時間がなかった。
・子どもたちが考えやすい課題にするべきであった。

(3) 第６学年　ボール運動「ゴール型」（フラッグフットボール）

【パドルタイムについて】
・思考判断の優れた子どもの姿がみられた。
・パドル，作戦の際や，プラン通りにいかないときに教師はかかわりをもつことが必要である。
・人数が増えたことで一人一人がより正確に動いたり，役割分担をしたりすることが求められる。
【ランキャッチゲームについて】
・動いているところに投げるということを意識付けるようにすればよい。例えば，「右のいないところに投げるからそこに動いて！」とどのタイミングでどこに投げるかをしっかり伝え合うとよい。
・守りの子たちにはじめから１点もやらない守りもあるということを意識付けても，ゲームが活性化するのではないか。

【作戦について】
・身に付けた技能を生かせるようにできるとよかった。
・いろいろな作戦をもっと考えられるとよかった。
・めあてにあったチーム練習をするところが一番重要である。
【フラッグフットボールについて】
・結果ではなくプロセスを評価できる運動である。
・運動量よりも立てたプラン通りに動けたかどうかであり，量よりも質である。
・他のボール運動とのつながりを考えて計画を立てていかなければならない。
【その他】
・音楽での時間管理がすばらしい。
・できなかった子がタッチダウンできたところが本時における求める子どもの姿である。
・子どもたちが，振り返りの時にタッチダウンできた友達の活躍に気付いて発表することがすばらしかった。
・チームのめあてから個人のめあてをもたせられるとよかった。

4　支部研究発表について

(1)　発表の概要

①研究主題

「運動に魅力を感じ，自ら学び，高め合う体育活動の創造」

～生涯スポーツを目指したカリキュラムの開発を通して～

②研究の仮説

・運動に夢中になって 取り組む子	・友達と教え合い 学び合う子	・技能の向上を目指して 努力する子
研究仮説 1	研究仮説 2	研究仮説 3
子どもの発達や運動の様相の発展を踏まえたカリキュラムを開発し，実践することにより，子どもは運動の楽しさを味わい，夢中になって運動に取り組むことができるであろう。	子どもの発達に応じた「学び方」の指導を系統的に行うことにより，質の高い教え合いや学び合いがなされ，互いに高め合うことができるであろう。	個に応じた学習課題を追究させるとともに，適切な指導を展開することにより，子どもは自らの技能の獲得や向上を目指して努力し続けることができるであろう。

③研究の視点

〈視点 1〉 カリキュラムの開発

〈視点 2〉 学び方の指導

〈視点 3〉 学びを支える授業作り

④研究の具体

ア　6 年　ベースボール型（スローピッチベースボール）

イ　3 年　ネット型ゲーム（キャッチバレーボール）

⑤研究の成果と課題

・ベースボール型のカリキュラムを作ることができた。

・単元を通じて指導するべき内容を意識しながら指導することができた。

・子どもの実態に合わせた学習展開を構築することができた。

・様々な領域，種目についてカリキュラムを検討していきたい。

・学び方についてどのような観点でモデル化していくか検討していく。

(2)　質疑応答

・ボールゲームで数的優位を作って行うことについてどうお考えなのか。

→函館としては，数的優位を作ることをタスクゲームで有効であると考えている。

・学習としてのゲームとしては同数を基本に考えてきている。

・タスクゲームがこれからどのようにつながっていくのか札幌として考えているのか。

→指導要領では簡易化が言われている。

5　指導講評

(1)　研究発表について

・以下の点で宮の森小学校の研究提案をしてもらったと感じた。
①組織研究として体育学習をどのように位置付けるのか。
②どういうキーワードで研究を進めていくのか。
③子どもの発達に即してどうあるべきであるのか。
④教材化をどう図っていくのか。
⑤子どもの達成感をどうフィードバックしていくのか。

(2)　第３学年　走・跳の運動「幅跳び」

・ゲーム化していくときの注意は以下の３点と考える。
①遊びの中において自分たちでルールを決めて動きを作っていくこと。
②動きの多様化は変化を付けていかなければならないこと。
③あきないということ～競争，ポイント化など
・秘密兵器（練習器具）について，子どもは「遠くへ跳びたい！」「マス（目標）の中に正確に着地したい！」と思っていた。
・秘密兵器（練習器具）が，効率的に子どもたちに入ってきたかどうかの検証が必要である。
・ビッグジャンプの時の子どものかかわり方については，子どものやり方の違いをどう保障していくとよいのかを考える必要がある。
・他者を理解できるように違いが分かる子どもたちを育てていかなければならない。
・個人課題の追求をどのように保障していかなければならないのか。

(3)　第６学年　ボール運動「ゴール型」（フラッグフットボール）

・アメリカンフットボールはアメリカ人の気質を表している。それは「前へ前へ」ということと「役割が明確」なことである。これらのことを考え，ゴール型のゲームでは，ルールを規制することで技能の質が高まっていく。
・動きの高度化を進めていかなければならない。

(4)　支部研究発表について

・学校としてはどうカリキュラムをしていくのかが課題である。そのためには
①「繰り返し体制化していくこと」
②「授業で証明していくこと」
③「実践していくこと」の３点が必要である。
・子ども像を明確化したうえで具現化していくことが必要である。
・目指す像をしっかりと明確化していけばよい。

6　成果と課題

(1)　成果

・２つの授業とも子どもたちからの歓声がある授業であった。
・子どもたちにとって魅力的な運動であった。

(2)　課題

・子どもにとって解決したいと思える課題を吟味する必要がある。
・個人課題の追求をどのように保障していかなければならないのかを考える必要がある。
・子ども同士の学び合いをどう生み出していくのかを考える必要がある。

研究主題

自ら学び，高め合う体育学習

～仲間との自分を見つめる学び合いで「できる」喜びを味わう体育学習～

札幌市立福住小学校

1　研究発表の概要

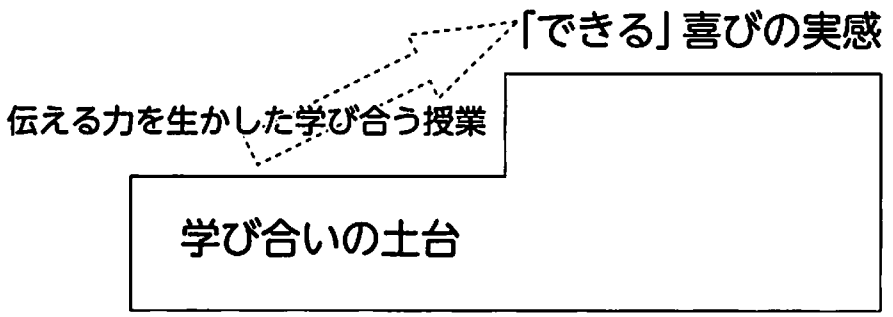
発表者：札幌市立福住小学校　教諭　村岡美千世

(1) 研究主題

・仲間との自分を見つめる学び合いで，「できる」喜びを味わう体育学習。

(2) 研究の仮説

・伝える力を生かし，学び合う授業を展開することで，子どもは「できる」喜びを味わえる。



(3) 研究の視点

〈視点１〉「『できる』喜びを味わえる教材の開発・工夫」

・単元の中で①身につけさせたい技能の明確化，②実態把握，③興味関心・個に応じた教材の開発・工夫，④運動との出会いや場の工夫，⑤生涯スポーツへの視点，⑥評価規準・評価方法という点を重視する。

〈視点２〉「『できる』喜びを味わえる学習過程の構築」

・主に本時の中で，①学習過程の把握，②試行活動，③個人課題の設定，④追求活動，⑤評価活動という点を重視する。

(4) 実践例

〈実践例１〉「第５学年　体力を高める運動～連続２人跳び～」

・短縄を１人が回し続け，その中を連続してグループの子が順に入って跳んでいく。

〈実践例２〉「第６学年　体力を高める運動～短縄チャレンジ～」

・ペアで短縄にチャレンジする。仲間同士，跳ぶ回数を数えたり，「肘を体につけて…。」などとアドバイスし合ったりして跳んでいく。

〈実践例３〉「第６学年　体力を高める運動～ダブルタッチ～」

・ダブルタッチの「入る→跳ぶ→抜ける」動きを単元を通して挑戦した。

○子どもたちが「できた！」と喜びを実感できる授業を積み重ねてきました。喜びを実感した子は，授業だけではなく，休み時間や放課後にも体を動かそうとします。

○実態や前時までの様子を踏まえ，「学び合いの土台」を分析します。集団としてどんな力が身についているか，何につまずいているか，を見つめます。課題を見出し，全体での解決を目指すこと，つまり「伝える力を生かした学び合う授業展開」，動きを見合い，よさを見付け合い，言葉や動きでアドバイスし合う，そんな子どもたちの姿が見られることを願って，授業作りを行ってきました。

2　公開授業について

(1)　第６学年　領域名　体つくり運動

「単元名　つくろう！クリアしよう！ My アッププログラム」　　指導者　上木　一也

・各グループに分かれ，ストレッチを始める。教師も各グループを回りながら，一緒にストレッチを行う。

・短縄を使って，ラダーステップやバンブーステップ，一人跳びなどの補強運動を行う。

・グループごとにダブルタッチで１抜けや３抜けなど本時の課題に迫る補強運動を行う。子どもたち同士で，声を掛け合い縄の中に入るタイミングを確認する。

・課題を確かめ，各グループで自分たちの追求活動を始める。

・教師は各グループを回りながら，スローモーションで入るタイミングを確認したり，うまくできている子の様子を見たりしながら，グループに関わっていく。

・交流により，追求のポイントが明確になり，グループごとに入るタイミングがはっきりするよう声を掛け合ったり，お互いの動きを工夫できるようにアドバイスしたりしながら，関わりをもって追求活動が深まった。

・自分が高まったと感じたポイントにネームカードを貼り，振り返りをする。

・整理運動をして授業を終える。

(2)　第１学年　領域名　器械・器具を使っての運動遊び

「単元名　コロコロランド」　　指導者　石田　愉良

・ストレッチや力試しの運動など準備運動を行う。

・グループごとに分かれて，ゆりかご・かしわもち・テレビ塔（肩倒立）・カエル立ち・カエルの足打ち・ブリッジなどの補強運動を行う。

・「起き上がり名人になる」という課題をとらえる。

・コースの上にゴムを張り，腰を高くして大きく前転する場など，いろいろな練習コースに分かれて，課題解決にむけお互いにアドバイスしながら活動を始める。

・教師は各コースを回りながら，「足をギュンとしようね」とか，「ゆりかごみたいにするといいね」などと，具体的に子どもたちに声をかけ，足を曲げるタイミングをイメージできるように関わっていく。

・本時で身につけたい動きを子どもたちに見やすくなるよう，上手にできた子にお手本になってもらいながら，焦点化した全体交流をもつ。

・コースに分かれ，動きが獲得できるよう活動を始める。

・教師は各コースを回りながら，動きが獲得できるよう，苦手な子に体を支え体感できるようにしたり，坂道になっている場で，より具体的に声をかけるなどして，関わっていく。
・足や腹筋などの整理運動をして，授業を終える。

3　研究協議

(1)　研究について

・夏は，外で元気に遊ぶ子どもの姿が多く見られます。「かたき」と呼ばれるボール遊びや登り棒に雲梯，短縄・長縄を使った縄跳びなど学年の枠を超えて遊んでいます。
・冬は，グラウンドのスキー山（雪山）で米袋のそりで遊んだり，新雪に自分の体の跡や花模様を作って遊んだりしています。
・そのほかにも，鉄棒や縄跳びの検定を委員会活動で行い，記録カードを作って活動を促してきました。このような遊びや体を動かす環境を整えることで，子どもたちが外遊びをするようになりました。

(2)　第６学年　領域名　体つくり運動

「単元名　つくろう！クリアしよう！ My アッププログラム」

Q思考・判断の評価に最後の交流で行ったネームカードを貼らせた（自己評価）のが関係があったように思うが，今回の四つの観点で自己評価するのは難しいように感じたのだが，どのような意図でネームカードを貼らせたのか？
・授業で取り組めるダブルタッチの「入って跳ぶ」のコツを教えてほしい。
Q技に挑戦することで巧みな動きが身につくのだろうか？ダブルタッチの中でシュートするなどの動きが巧みな動きとなるのだろうか？
Q子ども個々は，どんなめあてをもっていたのか？いろいろな技に取り組んでいたが，巧みな動きの質を上げようとしていたのだろうか？
Q５年生から６年生への動きの変化は？
Q「動きの持続」のとらえ方は，どうなっているのか？
Q体力向上プログラムの作成は，子どもたちに参考になるものを提示し，子どもたちが選択していったのか？
Aネームカードで，何が巧みな動きにつながっていたのかという子どもの意識を見たかった。
A大縄で，かぶり回しとむかえ回しでの８の字跳びを大切にする。とくに，むかえ回しでダブルタッチの感覚づくりとして大切に扱ってきた。
A技を見つけながら，リズムタイミングなどが巧みな動きの大事な要素になると，子どもたちが感じながら取り組んできた。
A動きの質としては，関係ないと思われるものもあったが，個ではできなくてもグループでお互いに関わりながら高め合えるようにしてきた。
A５年生では，短縄で変形の２人跳びやリレー形式の跳び方に取り組み，制限時間内での跳ぶ回数を増やすなどの経験をしてきた。
A事前にプロの方の跳んでいる映像は見せたが，子どもたちが自分たちの感覚をもとにオリジナルで取り組む技や難易度を考えてきた。

Q動きが見えるような手立てがなされていたが，指導内容（カリキュラム）などは，札幌として統一のものなのか？福住小の自校カリなのか？授業者のアイディアなのか？

A札幌市は「手引き」という全市共通のカリキュラムをもとに学校の地域性・児童の実態を踏まえながら取り組んでいる。

Q跳ぶ時間より追求する時間（考える時間）が多かったが，できない子（跳べない子）の運動量の確保は？

Qカードの書かせ方のポイントは？見取るポイントは？…自分なら，めあてや動きの変化などを見取る。

Qこの授業で何が学べたのだろうか？ダブルタッチの仕方？

Q服装に関して，安全面を考えると動きやすい服装となるが，指導は？

・何かをしながら別のことをするのは高度なことである。今の子どもには，足りない力でもあり，とても大切なことである。難易度を上げるのではなく，技の組み合わせで十分巧みな動きを身に付けられると思う。

A跳べない子へ関わり，グループの力で高められるようタイミングなどを確かめた。また，授業だけではなく，休み時間も活用してきた。

A数値化することは難しいと思うので，単元を通して見取っていく。

A行い方（コツ）で，巧みな動きが時間できるように心がけている。

A札幌は体操着がないので，「体育がある日に動きやすい服そう」という指導をしている。

(3) 第１学年　領域名　器械・器具を使っての運動遊び

「単元名　コロコロランド」

Q前転がりと前転の違いは何だろう？体を順にマットにつけていく感覚が大事である。今日の授業では，ゆりかごから着地への流れがよく見えた。着手の指導も低学年からしっかり行うべきでは。

Q動きのバリエーションは大切だが，後ろ転がりや横転がりなどの感覚づくりは？

・裸足（靴を脱いで）でマットの上を動くことも大切だと思う。

Q「よい動き」とは，１年生にとってどのようなものだろうか？

Q運動遊びと運動の違いや運動遊びのおさえは？

・楽しくできる場…思考判断や目標など，単元構成を工夫することが大切であると感じた。

Q視覚化…カードや絵でイメージしやすくなっていた。共有化…話し合いや子どもたちができたことを確認するタッチなど。焦点化は？ストーリー性と「起きあがる」ということの関連は？挑戦したくなる場の工夫は？

A前転がりなので，器械運動の前転の手前と考えている。着手については，「しっかり支える」という点を大事にしたい。

A子どもたち同士での見合いができるよう，今回は前転がりに縛った。２ヶ年のスパンで考え，補強運動に取り入れ，感覚づくりを大切にしてきた。

A１年生で動きを工夫することは限られていると思う。そこで，子どもたちの気付きを生かしながら取り組んできた。

A系統性をふまえて器械運動につながるものと考える。

A前時にできた，子どもの紹介をすることで，本時のイメージにつながり，「まっすぐ」「どすんとしない」など，子どもたちの「よい動き」となるキーワードにした。

4　支部研究発表について

(1)　発表の概要

①研究主題「豊かにかかわり　高め合う　体育活動を目指して」

豊かな人間性	運動（教材教具）	子供同士の学び
豊かな発想	⇗　⇖	子供の資質能力
豊かな生活	子供 ⇔ 教師	教師の指導力

②めざす子供像「自ら求める子」「豊かにかかわる子」

③研究仮説「視点１…〈指導内容〉基礎となる体力や技能の高まり」「視点２…〈教師のかかわり〉人や運動と豊かにかかわる態度の育成」

④めざす授業像「基礎・基本の定着をめざす授業」

⑤平成24年度のテーマ「小中の系統性をもった指導」

⑥研究の実際

5　指導講評

(1)　第６学年　領域名　体つくり運動

「単元名　つくろう！クリアしよう！ Myアッププログラム」

・子どもたちは集中して，楽しんでいたのがよかった。

・ターナーチェンジをしている子たちがいたが，体をひねれている子は出ながら同時に縄をつかむことができていた。遊びの中でも，ひねる動きを取り入れてた遊びをしていくとよい。

・組み合わせの運動は大事であるが，個々の動きを完成させることも大切である。技を精査して，完成度の高い技をダブルタッチの中に取り入れるのでもよかった。個々に短縄の動きにも能力差が見られたので，そうすることで，一定の規準で評価もしやすかった。

・何を指導するのか，教えるのか，ということを明確にして授業を行うことが大切である。

・準備運動での，ラダーステップは，短縄を活用したため梯子状になっていなかったため，足が上がっていなかった。また，同じ足からスタートしていたので，逆の足からスタートさせ，リズム感を養ってあげるとよかった。

(2)　第１学年　領域名　器械・器具を使っての運動遊び

「単元名　コロコロランド」

・前転がりは，頭の上・頭の斜めを越えることができればよい。今回は，起き上がることで前転に近づける教材化になっていた。補強運動の中の側転（川跳び越し）が上手だったので，今回の授業に取り入れてもよかったのではないか。

・１年生は，体格的にまだ部位の発育に差がなく，側転はしやすいが，腹筋を要する転がり系は，指導に工夫が必要である。特に，腹筋が鍛えられないと前転の起き上がりはしにくい。

・場のねらいが，きちんと子供に落ちていなかった。鈴がついている場では，ならないように前転がりする意識が見られなかった。

・場によっては，踏み切り板を活用するなど，身につけさせたい動きに応じて手立てが必要

だった。
・子どもには，腕支持が難しかったようだ。「カエルの足打ちから前転がりを始めるんだよ。」という声かけがあってもよかった。腕支持から頭越をすると転がりやすくなる。
・子どもにとって，足をそろえてたつことは難しい。回転スピードをつけたり，足をクロスする・膝を開くなどしたりすると小さい子でも立ちやすくなる。

6　成果と課題

(1)　成果

〈6年生〉
・子どもたちのアイディアを生かして，レベルを設定することで意欲的に活動することができた。
・大縄で，かぶり回しやむかえ回しで8の字跳びをすることがダブルタッチの「入る・跳ぶ・出る」の感覚づくりになった。

〈1年生〉
・ゆりかごから着地への流れは，1年生にもわかりやすかった。
・補強運動の中で，腕支持などのいろいろな感覚を養っていくことは大切であった。

(2)　課題

〈6年生〉
・完成度の高い技で取り組むなど取り扱う技を精査したり，ポイントを絞っておくことで教師の評価も子どもの自己評価もしやすかった。
・「巧みな動きの質」を上げるためには，何をどう教えるのかもっと明確にすべきであった。
・ひねる動きにも着目しておくとよかった。

〈1年生〉
・着手について，もう少し具体的に指導してもよかった。
・場のねらいがきちんと子どもに伝わり，意識化できる手立てが必要であった。
・身体的発達と運動構造に着目した，教材化も必要であった。

研究主題

「わかる」「できる」夢中になる体育学習

～体を動かす心地よさや,動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～

札幌市立資生館小学校

1　研究発表の概要

発表者　札幌市立資生館小学校　教諭　生駒　大地

(1) 研究主題について

本校は，自分の目標や願いをもち，そこに向かって進んでいく意思をもつ子どもを育む「夢かなう学校」を教育理念に，研究主題を「夢をかなえるすてきな子の育成」，副主題を「わかった　できた　楽しい授業」と設定して日々授業を研究している。毎日の課題解決的な授業を通して，一人一人の子どもが自分の課題をもち，それを追求する手立てを仲間や教師と共に学んでいくことで，「わかった」「できた」という実感をもつことができると考えている。

本校の児童は,スクールバスで通学したり,近隣に運動できる場所が少なかったりといった実態から，運動経験が極端に少なく，体を動かすことに苦手意識をもっている子どもが少なからず見られる。また，昨年度の新体力テストでは，反復横とびは男女とも全学年で全国平均値を上回っているものの，それ以外では，男女ともほぼ全学年で全国平均値を下回るという結果が出ている。加えて学年が上がるほど，全国平均値との差が拡大していく傾向にある。スポーツ少年団に入り，積極的に運動に取り組んでいる子はいるが，それ以外の子は日常的に運動に親しむことは少ない。体力の低下，運動する子としない子の二極化という全国的な傾向が本校にも当てはまっている。また，生活リズムが不規則で，学習に向かう準備が整わないまま登校している児童も見られる。学校生活の中でリズムを整え，運動への関心を高めるために,登校後の朝の時間を活用して全校で体操をしたり,放課後のグラウンドを開放して体を動かす場所を提供したりするなど学校一丸となった取り組みも進めているところである。

こうした本校の子どもたちには，体を動かすことの心地よさを伝え，動きが高まることの喜びや，ともに学び合い高め合おうとすることの楽しさを実感させることが大切だと考えた。「楽しさ，心地よさを感じ運動する」→「仲間との関わり合いの中で高まりを実感する」→「より夢中になって運動に取り組む」というサイクルを体育科の学習の中で経験していくことで，その他の様々な場面でも日常的に仲間と運動に親しんでいこうとする子どもを育てていきたいと考えた。

本校の研究の経過と児童の実態を踏まえ，体育部の研究主題を，『「わかる」「できる」夢中になる体育学習～体を動かす心地よさや，動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～』と設定した。また，本校の目指す子ども像をもとに，体育部としての目指す子ども像を以下のものに設定した。

○自分の課題をもち，自分から運動へ取り組もうとする姿
○仲間と共に学び，教え合い助け合う中で，動きの高まりや運動の心地よさを味わう姿
○頭と体を働かせ，粘り強く運動に向き合って課題を解決していこうとする姿

(2) 研究の仮説

目指す子ども像に迫るために以下の仮説を設定した。

> 個に応じた課題をもてる運動・人とのかかわりが生まれる運動に十分浸り，個の高まりとともに集団の高まりが達成できる学習を構成することで，一人一人の子どもが「わかる」「できる」を実感し，「もっとうまくなりたい」「もっとみんなと楽しく体を動かしたい」と夢中になって運動に取り組むことができる。

(3) 研究の視点

〈視点１〉　運動への意欲を高める教材化

子どもたちが「楽しそう！」「やってみたい！」と運動への意欲を高める教材との出会いを設定する。具体的には次の３点を重視した教材化を行っている。

○自分にもできそうだという意欲がもてるルール・場等の設定

○個々の技能差を許容できる課題設定

○人と関わり合いながら運動できる学習展開

このように，意欲をもって運動に浸ることができる教材化を図ることで，子どもたちは課題をもって運動に取り組み，互いに教え合い助け合いながら共に動きを高め合っていく姿がみられるようになってきている。

〈視点２〉　個の高まり，集団の高まりを意識させる教師のかかわり

運動場面の中で，子どもが自分の動きを客観的に認識することは難しい。教師が評価の観点を明確にし，動きの高まりが表れた瞬間を価値付け，即時的に評価していく関わりを大切にしていく。そこでつかんだ個々やグループの高まり，運動のコツを交流場面で共有する。具体的には，学習カード，掲示物，映像機器の活用などを通して，「運動のコツが目で見える」交流を図る。ここで共有した学びを伝え合い教え合いながら，子どもたちに再び運動に取り組ませていく。このような教師の関わりから，子ども同士が互いの動きに関心をもち，仲間と関わり合い高め合いながら運動に取り組んでいくことができると考える。

2　公開授業について

(1) 第６学年　器械運動「マット運動」　　授業者　山本　敦史

〈学習課題の把握〉

前時までにペアで考えた技の組み合わせを，運動①で試すことを確認した。その際に，２人の動きをそろえるためには，声を出すことが大切であると指導した。

また，技自体が正しい動きなのかについては，事前に子ども達に配付している資料をもとに確かめることも確認した。

〈運動①〉

ペアで動きをそろえることに焦点を当てて運動させるために，児童の実態応じた練習ができるよう坂マットや細いマットの場を用意した。また，映像機器による遅延再生でペアでの動きの様子をすぐに確認でき，次の練習に生かせられるようにした。教師は，それぞれのペアに「そろってきたね」や「着地がもう少しそろえられるかな」など声かけをしていた。

〈全体交流〉

運動①で，動きがそろわなかったペアのために，全体で動きをそろえるためのコツを考えた。児童からは，「１，２」など声に出して数を数えると良いという考えが出た。それをもとにリズムを合わせることが大切だと確認した。また，着地した位置のずれを取り上げ，これをそろえるために，体の大きさの違いはあるものの技の大きさも気を付けると良いということも確認した。

〈運動②〉

全体交流で確認した２つのポイントに気を付け，再度練習を行った。教師は，「声を出そう」「自分たちのリズムを作ろう」「技のタイミングがそろってきたね」など，子どもたちが熱心に取り組む姿を称賛していた。また，同じマットで練習する他のペアから声をかける姿も見られるようになった。

(2) 第２学年　ボールゲーム「キラキラ・シュートゲーム」　　授業者　長谷部舞里

〈準備運動「なかよしボールタイム」〉

子どもたち一人一人にボールを持たせ資生館小体操を行った。その後，なかよしボールタイムとして，３つの場（①的をねらって強く早く投げる場，②山なりのボールを投げる場，③穴をねらって正確に投げ入れる場）をチームごとに順番に経験をさせた。毎回，授業の最初に取り入れることで，ボールを投げる能力を高めることをねらった。

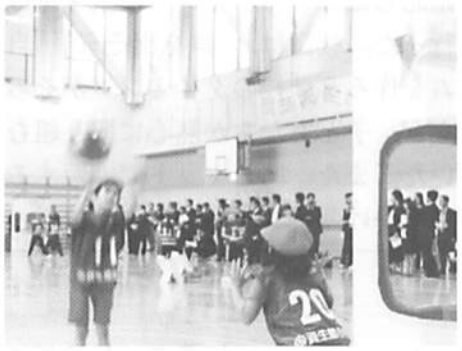
〈シュートゲーム①〉

ジャマーの出現により，ゴール正面の穴にボールを入れにくくなった。そこで，ゴールの上からも得点できる新しいルールが加えた。児童は，ゲーム①で実際にゴールの上から得点を決めようとするが，投げたボールがゴールの上まで届かなかったり，ゴールを越えてしまうなどの姿が見られた。

〈全体交流〉

全体交流では，ゴールの上をねらって得点できた子を取り上げ，「どのようにしたらゴールの上から得点できたの？」と問いかけたところ，「ちょっとやさしく上に向かって投げる」という考えが出てきた。また「ビューッと投げたら，ゴールを越えたよ」などの考えも出た。そこから，ジャマーに邪魔されずにたくさん得点を取るためには，「ゴールの上をねらって，やさしく投げると良い」ということを確認した。

〈シュートゲーム②〉



児童の動きから，全体交流で確認したことを意識して，ゲームに臨んでいる子が増えたことが伝わってきた。また，周りで見ている同じチームの仲間からも「上から投げて」「もっとやさしく投げたほうがいいよ」などアドバイスをする姿も見られるようになった。

3　研究協議

(1)　第６学年　器械運動「マット運動」

○ 資生館小学校として６年間のマットプランがある中で，どのように取り組んできたのか。

学習指導要領解説に例示されている技を各学年で行ってきた。また，札幌市には，市内の全小学校に配布されている学習の手引きがあり，それに基づいて指導している。しかし，実態としては，５年生までの学習で習得しているはずの技が身に付けていないまま，６年生になった子もいる。そこで本単元では，これまでの学習で習得できなかった技についても，さかのぼりながらできるようにすることも考えて授業づくりを行ってきた。

○ ペアの決め方は，どのように行ったのか。

単元前半の個の追求場面において，児童の実態を踏まえてできるだけ同じような能力の子ど

も同士がペアになるよう教師側で考えた。その結果，これまでマット運動を苦手としている子どもたち同士でグループが構成されたために，逆に意欲的に取り組んでいる姿も見ることができた。加えて，少しずつより難しい技に挑戦してみようと意欲を高める姿も見ることができた。

○授業会場に設置されていた映像機器は，どのように生かされ，効果はあったのだろうか。

映像機器は，本単元の最終目標であるペアで技をそろえるために自分たちの技がそろっているのかをすぐに確認することができ，非常に効果的であった。しかし，それらを活用しているペアは多くはなかった。実際に，技がそろっているかどうかを確かめる手立てとして，周りで見ている友達にアドバイスしてもらったほうが，意欲的に取り組むこともできると感じた。

○今日の授業において，言語活動とは，どのような場面のこととしてとらえていたのか。

全体交流の場面を言語活動としてとらえている。また，自分の動きを言葉にする活動やペアで教え合う場面も言語活動と言える。また本時の「リズムをそろえる」なども言語活動の１つととらえている。

(2) 第２学年　ボールゲーム「キラキラシュートゲーム」

○本単元が，６年生までの学習とどのようなつながりがあると考えているのか。ボール運動のゴール型ゲームの学習全般にはつながっていかないのではないか。

本単元は，中学年のポートボールや高学年のバスケットボールにつながる運動と考えた。相手に応じた動きを考えていくことがゴール型ゲーム全般につながり，相手に応じた動きを考えさせることは評価項目にある「思考・判断」ととらえられる。これらを考えさせることが，今後全てのボール運動にもつながっていくものと考えた。

○本時で使用したボールは，どのようなことに重点を置いて選択したのか。また，ボール操作の技能面を高めるためにどのような取り組みをしてきたのか。

どの子も抵抗感を感じることがなく，操作しやすいものと考え選択した。また，児童がボール操作に慣れさせるために，人数分のボールを準備し，たくさん触れる機会を作ってきた。

○ボールを操作しながら，動きを身に付けることは難しいのではないか。

２年生という発達段階を考慮し，実際に動きながら試してみることで気付くことも多いと考えた。実際に，振り返り場面での感想や学習カードからも児童の気付きを見取ることができた。

○今日の授業において，言語活動とは，どのような場面のこととしてとらえていたのか。

自分の動きを言葉で表現する場面が言語活動ととらえている。自分の考えを表現しようとするが，それができない子に対して友達が助けてあげることを繰り返していくことで，苦手としている子もどう表現すればよいのかを学んでいく。体育の授業を通して，子どもたちの動きのイメージと言葉をつなげていきたい。

4　支部研究発表について

発表者　当麻町立当麻小学校　中山　敬史

(1) 発表の概要

①研究主題「運動のよさを実感し，互いにかかわり学び高め合う体育学習
～運動に熱中し，仲間と学び合う子の育成～」

②研究の視点

〈視点１〉子どもが熱中する教材作り

〈視点２〉課題解決を基盤とした，仲間とかかわり学び合う工夫

〈視点３〉成長や学びを実感できる評価

③成果と課題（○成果　▲課題）

〈視点１〉子どもが熱中する教材作り

○どの学校でも使用されている教具に一工夫を加えて実践することが，運動の日常化へつながっていく。

▲運動のよさを実感した姿を「運動に熱中している」とするが，運動に熱中しているかどうかを客観的に測るものさしが必要となってくる。現在は，教師の主観でその姿を見取っているので，具体的な検証方法を検討していく必要がある。

〈視点２〉課題解決を基盤とした，仲間とかかわり学び合う工夫

○個に応じた学習課題を設定することで，全員が運動のよさを実感させることができる。

○グループ課題の設定のためには，その運動に対して十分にグループで取り組む時間を確保することが前提となる。また，達成可能な課題を立てることも必要である。

○グループ内での役割分担を明確化しておくことで，グループがより集まりやすい。

○課題追求場面で技能ポイントを指導したい場合は，子どもたちを一度集め，模範となる子の動きのどこが良いのかを思考させることが，個やグループの高まりのために必要である。

〈視点３〉成長や学びを実感できる評価

○相互評価においては，ネームマグネットを用意することで，自分の立場がはっきりとし，進んで良いところを見つけることができる。

○良い動きや考えが進んで教師が取り上げ価値付けすることで，子どもたちの相互評価をする観点がはっきりしてくる。

▲学習カードによる自己評価であるが，低学年においては簡易的なものにしないと，時間がかかり，運動量の低下につながるので，工夫が必要である。

5　指導講評

(1)　第６学年　器械運動「マット運動」

○「技を組み合わせてペアでそろえる」は，学習指導要領解説にもあり，男子新体操やスイスの集団器械運動につながり，非常に有効な考えである。

○ペア学習をすることは，２人でやってみようという意欲面につながる手段にもなりうる。

○ペアで技を合わせることは，基本の技の技能面を高めることにつながり，技がそろったときに，ハイタッチをするペアがあったが，この行為も技を合わせる必然性の１つと考えられる。

(2)　第２学年　ボールゲーム「キラキラボールゲーム」

○本時で授業者は，児童に「ふわっと」投げることを身に付けさせたかったのだが，「ビューッと」投げることととどちらが楽しいと感じる投げ方であったのか。教師が身に付けさせたいことと，児童が楽しいと感じることが一致するような授業づくりを目指していくべきである。

○ゴールの上に向かって「ふわっと」投げている児童が，全体交流後のゲーム②でたくさん見ることができた。しかし，教師側がねらっていた「ふわっとやさしく」よりも，上に向かって力強く投げているように見える子も多く見られた。そこで「ふわっと」という考えを児童により具現化させて理解させるためには，「どのような軌道であったか」と聞いても良かったのではないか。